
ギルドナイトを目指して！

風の双剣使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルドナイトを目指して！

【Nコード】

N7124J

【作者名】

風の双剣使い

【あらすじ】

ライトボウガン使い少女・ミカンはギルドナイトを目指して今日も明日も全力奮闘！

その先に見えるモノは一体何か？

PS、

この物語は以前短編小説として公開していた『ギルドナイトを目指して！』ミカンの第一歩』を好評につき連載作品として再投稿した物です。

0・オープニング・ミカンの第一歩（前書き）

遂に始動しました『ギルドナイトを目指して！』！！

この小説の構想を練り始めたのが去年の11月中旬辺り……それから約3ヶ月……長かったような短かったような日々を経て遂に連載開始です！

その一番最初の話は以前短編として投稿されていた「ミカンの第一歩」となっております。

内容自体は変わっていない為、以前読んだ事があるから読まなくてもいいと言う方は上にある【次の話>>】を押してください。

キャラクター紹介がされた後、第1話が始まります！

それでは第0話「オープニング・ミカンの第一歩」が始まります！

0・オープニング・ミカンの第一歩

その街は東西北を巨大な岩壁に囲まれ唯一無防備な南側の谷筋にはバリスタや大砲に撃龍槍などの巨大兵器を設置する事によって無敵の護りを誇っており、過去一度たりともモンスターの侵入を許した事がないと言う。

その安全性を中心にその他色々な要素により商人からハンターまで色々な人々が集まりこの大陸最大の街となった場所だ。

この街の名前はドンドルマ……言わずと知れたハンターズギルド本拠地・大老殿があるハンター達の本拠地だ。

ここはドンドルマの大衆酒場……。

この建物はドンドルマの中でも随一の広さを誇っている場所。入口に来るだけで気づくのは焼けた肉や魚の香ばしい匂いや多種多様のスパイスに数々の酒の香りだ。

中に入ってみれば今度は建物の大きさに見合った尋常では無い数のイスにテーブル、それをすべて埋め尽くす大勢の人々がワイワイと賑やかに騒いでいる姿が見て取れる。

大衆酒場はハンターズギルドの外向機関であるギルドカウンターが設置されている為、この街に居るハンター達は皆この場所で狩りの契約をする。

その為客の殆どはハンターだ。しかしよく見てみればその他にも商人の様な人や街人の様な人、何かの職人の様な人の姿も見える。

「かんぱいー」

酒場の一角で楽しそうに祝杯をあげる声が聞こえた。

声がする方を見てみるとどうやら一人の少女と一匹のアイルーが狩

りの成功を祝っているようだ。

「いや、それにしても今回も上手くいったね」
そう言った少女は少し小柄で明るいオレンジ色のウィンドボブと言
う短髪の髪型をしている。

黄緑色をした瞳が楽しげな表情を見せる。

身に着けてる防具は蒼くて鋭角的な雰囲気纏った鱗や甲殻を用い
た防具・リオソウルシリーズと呼ばれる物……超有名な強力なモン
スター・火竜リオレウスの中でも特に強力である亜種の素材を使っ
た防具だ。

それだけで少女の実力の程が分かる。

少女の名前はミカン・スノウスター、実力はこのドンドルマ住む下
位ハンターの中でも抜き出ており、すでに上位ハンター並の力は持
っているだろうと言われる優秀なハンターである。

まあ、この無邪気に騒いでる姿を見た感じではとてもそんな凄いハ
ンターには見えないだろうが……。

「今回はさすがにヤバいかニヤ？とも思ってたけど何とかなつてよか
ったニヤ」。まあ、アタチのタルハンマーに掛ければこの位楽勝
って事ニヤね」

少女の言葉に一緒にいたアイルーが少々自慢気に応じる。

毛並みは綺麗な桜色をしておりその上からオトモアイルー用防具・
どんぐりメイルを着た雌のアイルーだ。

「モモったら調子のちゃって」

ミカンがそう言いながら目の前の桜色のアイルー・モモのおでこを
指でちゃんと突く。

「あれっ？二人とも久しぶりね！その様子だと今回の狩りも
成功したの？」

ミカンとモモが楽しそうにしていると、モモの後ろから金糸の縁取
りのあるベストに同じ様に縁取りされた羽根飾り付きの幅広帽と言
う一見すると服の様にしか見えない真っ赤な防具・ギルドガード紅

シリーズを着た女性が近づいてきた。

防具などから推測するにこの女性はギルドナイトであるようだ。

「あっ、アプルさん！！ お久しぶりで〜す！」

そう言いながらミカンは女性に向かって軽くお辞儀をする。

モモもミカンの様子を見て大慌てで振り返り同じようにお辞儀をした。

「そんなに気を使わなくてもいいのに……。」

女性が苦笑を浮かべながら言う。

女性の名前はアプル・ホワイトツリー。

艶やかな光を放つ真っ赤な髪に綺麗なクリーム色の眼をした長身の女性だ。

その瞳には何事にも動じないと言う絶対的な自信が感じられる力強さがある。

「……ところで今回はどのモンスターを狩りに行っていたの？」

アプルが聞いてきた。

「はい、今回の相手はディアブロスでした。 いやー……ディアブ

ロス狩りは初めてだったのでさすがに苦労しましたよ……。」

ミカンが先ほどまでの笑顔を苦笑に変えながら言う。

「確かに今回はホント〜に大変だったニヤ！ 地中からの強襲とか

無駄が殆ど無い突進には苦労したニヤ〜。」

モモは少々疲れたような顔で言う。

「うんうん！ 特に地中からの強襲は今まで殆ど経験無かったから

かなりヤバかったよね〜！」

ミカンはモモの様子に気づいてないのかテンション高めに言う。

「フフ……相変わらず凄い実力ね。 上位昇格ももうスグなんじ

やない？」

アプルが二人（？）のやり取りを見て楽しそうに笑いながら質問してきた。

「どうでしょうねえ？ まあギルドナイトになる為にもそろそろ上位に上がりたいですけどね！」

それに対してミカンがいつもの楽しそうな笑顔のまましみじみといった様子で言う。

「う〜ん……やっぱり飽くまでギルの後を追うのね……。」

アップルも同じようにしみじみといった様子でミカンの言葉に答えた。

「えっと……。……ま、まあ師匠を探す手はこれしかないですからね……。……あ、そろそろ帰らなきゃねモモ！……。」と言いつつ

でアップルさん、その話はまた今度って事で！」

「ミ、ミカン！ ちょっと待つニヤア〜！」

ミカンはアップルから話を振られた瞬間焦ったような顔になり、モモの首根っこを掴むと酒場から逃げるように去っていった。

「……。コレも相変わらずって事か。」

アップルはミカンが酒場から出ていったのを確認すると苦笑しながら何処かに向かつていった。

数日後の酒場にて……、

「え！？ その話は本当ですかアップルさん！」

ミカンの驚いた声が酒場の一角に響き渡る。

その声に周りにいた数人が振り向き中には飲んでいた酒が入った杯を危うく落としかけた人もいる。

「そうよ、しかも今回は大長老様が貴方の活躍を聞いてから直々に上位昇格試験を受けさせたいって言っていたそうなのよ！」

アップルが周りの様子を完全に無視して言う。

大長老と言うのはハンターズギルド総本山である大老殿の長にしてこのドンドルマの街の一切を取り仕切っている物凄い人物の事だ。その大長老直々に話が来ると言う事はそうそうない事だ。

「大長老様から直々……ですか……。」

ミカンは驚きの余り怖々とした声で言う。

「まあそれだけ期待されてるって事だから頑張って狩ってきてきな！」

「は、はい……！」

ミカンはアプルの気楽そうでありながらも期待に満ちた言葉を聞き少々緊張しながら答える。

「……そう言えばその昇格試験相手は何なのかニヤ？ やっぱり火竜の番とかグラビモスの亜種とかみたいにかなり強い奴かニヤ？」そこにこれまで黙っていたモモが不安と若干の期待の入り混じったような顔で聞いてきた。

「あ、それアタシも気になる！ ティガレックスとかだったら怖いから嫌だな……。」

ミカンが少しおどけた様子で言う。

「ん？ ああ、その事か……。今回の相手は……ヒプノックだ！ アプルが何気ない様子で言う。

「ヒ、ヒプノックう？」

アプルの言葉にミカンとモモが訝しげに言葉を繰り返す。

酒場での出来事から更に数日後……、

「……ふう、コレで持ってきたアイテム全部かな？」

ミカンが先ほどまで持っていた荷物を地面に置き、額を流れている汗を拭いながら言う。

現在ミカンとモモはバテユバトム樹海・通称樹海と呼ばれる狩場に来ていた。

その名通り樹木の海と言うに相応しい狩場だ。

今いるベースキャンプからは狩場全体を見渡す事ができ、まず初めに目が行くのはやはり狩場の中心にありここの象徴とも言われる巨大樹だろう。

元々は天まで届くであろう程だったと思われる巨大樹の上の半分より上の部分がバツサリと切り落とされたような物で、近づいてみれば天と地を塞ぐかの様なその途方もない巨大さに驚かされる。

内側は空洞になっており色々なモンスターが巣として使っているらしい。

「ミカン、とりあえず道具は全部あるのか確認したらどうかニヤ？」

モモが一応と言った様子で言う。

ミカンもそう思ってたのか早速持ってきたアイテムの整理し始めた。

「えっとまずは……補助アイテムは回復系が回復薬に回復薬グレートにこんがり肉それと用心して秘薬……能力アップ系に力の護符と守りの護符と後は調査書の？〜？と……、次に道具は……シビレ罠に落とし穴に大タル爆弾と大タル爆弾Gがあつて後は閃光玉は調査分も含めて限界数全部ある……、最後に弾丸はLv1通常弾にペイント弾……火炎弾が調査分も全部あるから……、うん、OK！アイテムはバッチリだよ！」

ミカンはアイテムの確認を終えると自信たっぷりと言った様子で胸を張る。

「そんな事自慢されてもニヤア……。それにしても今回はかなり沢山のアイテムを持ってきたニヤ〜。特に爆弾何て危ない物普段は殆ど使わないじゃニヤい？……幾ら何でもコレはやり過ぎじゃニヤいの？」

モモが苦笑しながら言う。

ヒプノックは初狩りだがミカン達が噂で聞いた事があるヒプノックの強さはせいぜいイヤンクックなどの初級モンスターよりも少しだけ強い程度のモノだ。

さすがにコレだけのアイテムを持ちこまなくてはならない相手とは思えない。

「まあ確かにそうかも知れないけど相手は上位モンスターだよ？その上この試験に合格すれば上位に上がれるんだから気は抜けないでしょ？」

ミカン気合に満ちた顔で問う。

念願の上位昇格が掛かっている為いつも以上に気合が入っているのだ。

「ま、まあとにかくがんばろうニヤー！」

モモがミカンの様子に苦笑しながら言った。

それから暫くして……、

「うつわぁ〜……相変わらずこの木は凄い大きさだね〜！ ……」
「コには何回か来た事はあるけど幾ら来てもコレには驚かされるよ！」
ミカンが巨大樹を見上げながら言う。

ミカン達は現在エリア6に来ていた。

このエリアは先ほどのベースキャンプから坂を下ってすぐにある平地のエリアだ。

ミカン曰くココのエリアが巨大樹を見上げるのにもっとも適していると言う話だ。

「……って、そんな事よりヒプノックに会う前に試し撃ちをしたいって言ってたのはいいのかニヤ？」

モモがミカンに聞く。

ちなみにミカンの現在の装備は防具が酒場でも着ていたりオソウルシリーズ、武器は黒猫・メラルーの姿を模したライトボウガン・メラルーラグドールを背負っている。

ついでだが現在ミカンは持ちこんだ道具の殆どをベースキャンプに置いたままで来ていた。

罾や爆弾などの道具はかさばる上出会った事も無いモンスター相手を罾に誘導したりするのは難しい為、とりあえずは様子見をして相手の動きを見切ってから持っていくと事にしたのだ。

「あ、そう言えばすっかり忘れてた。 ……え〜と、何か丁度良さそうな獲物は……あ！」

ミカンが獲物になりそうなモンスターを探していると奥の方からブルファンゴが突進してきた。

ミカンはその突進に逸早く気づいて回避するとすぐさまメラルーラグドールのレバーを引いてLv1通常弾を装填する。

「よし！ 丁度いいしアイツで試し撃ちしよう！」

そう言うとミカンはスコープを覗き込みブルファンゴの頭に狙いを

つけると同時に引き金を引く。

黒猫の尻尾の先から連続して弾丸が撃ち出された。

その数は全部で五発。

メラルーラグドールには高性能の速射機能が備わっておりLv1通常弾と火炎弾を一度に5発ずつ速射する事ができるのだ。

「もう一丁!」

ミカンは掛け声と共に同じに狙ってもう一度引き金を引いた。

いつもならこれだけで十分倒す事が出来るのだがさすがに上位だけあつてまだ倒れない。

「ニヤ〜〜!!」

そこで今度はモモが何処からか取り出した小タル爆弾を頭の上に掲げながらブルファンゴに走り寄る。

「オニヤアー!!」

モモが雄叫びを上げながらブルファンゴに向かって小タル爆弾を投げつける。

するとさすがに致命傷だったのかブルファンゴは爆風で吹っ飛びそのまま動かなくなった。

「ま、こんなモンニヤね!」

ブルファンゴにトドメを刺したモモは誇らしげに胸を張る。

「うゝ、ちよつと悔しいかも……。でも弾丸の手応えからしてとりあえず今日の調子は完璧みたいだから良しとするか……。」

ミカンはモモの様子をみて悔しそうに地団駄踏みながらも安心した様子で言った。

案外悔しそうにしているのも照れ隠しか何かなのかもしれない。

「……うん! じゃあモモ、早く次のエリアに行こっか!」

ミカンはそう言うのと勢いよく走りだした。

「ちよ、ちよつと待つニヤ! アタチを置いてくニヤ〜〜!!」

モモはそう言うのと大慌てでミカンの後を追いかけていった。

ブルファンゴ討伐から更に数分後……、

ここはエリア5、先ほどのエリア6から小さな丘を一つ乗り越え、と到着するこの狩場でもっとも東にあるエリアだ。

先ほどのエリア6と同じで平地のエリアであり東側にある崖の周辺には木が生えていない為に視界は比較的開けている。

奴……ヒプノックがこの平地の中心で静かにたたずんでいた。

まず初めに目につくのは普通の鳥竜種とは全く違う羽毛に覆われた姿だろう。

普通鳥竜種のモンスターと言うのはイヤックやランポス系統等の様に鱗や甲殻に覆われている、全体的に硬くつるりとした感じの印象がある。

しかしヒプノックはそれらの鳥竜とは全く逆の、腰の辺りには虹色の派手な尾羽があり胸や翼は柔らかそうなオレンジ色の羽毛が覆っており、全体的にフワリとした印象を感じるモンスターだ。

「いた！ 多分アレがヒプノックだよな？」

ミカンはエリアに入ると同時に近くの茂みに隠れながら小声で言う。モモも同じように茂みに隠れる。

ヒプノックはミカン達の気配を感じたのか頭を持ち上げて辺りを覗き始めた。

その様子を見てミカン達は体を強張らせる。

……しかし暫くすると勘違いだったかと思ったのかまた先ほどと同じように力を抜いてエリアの中心でたたずみ始めた。

「……ふう……危なかった……」

ミカンはまだ完全に気を抜かないまでも安堵の声を漏らす。

「……じゃあモモはこのまま気づかれないようにヒプノックに近づいて爆弾を投げつけられない？ アタシの方はモモが攻撃したらすぐにペイント弾を撃ってこっちに気を引くから。」

ミカンはそう指示をするとヒプノックに気づかれないように気をつけながらペイント弾を装填する。

「分かったニヤ。こっちはしっかりやるからそっちも気をつけてニヤ。」

モモはそう言うとしゃがんだままヒプノックを方へ向って行った。
モモが暫く進んでいき爆弾の射程距離まで近づいていった。

(……よし、コレ位近づけばいいかニヤ?)

そう考えたモモは声を出さないように手振り準備OKだとミカンに伝える。

ミカンの方もすぐに理解したらしく手振りで分かったと伝えた。

(アツチもOKみたいニヤね。じゃあ……いくニヤ!)

「ニヤア~~~~!!」

モモは大きな声で叫ぶとヒプノックの無防備な背中に向かって勢いよく小タル爆弾を投げつけた。

「ピギヤアツ!!」

完全に力を抜いていたヒプノックは無防備な所に喰らった攻撃に驚いて大きく仰け反る。

「ハイツ!」

仰け反り状から戻ったヒプノックの気を引く為にミカンがペイント弾を撃ち出す。

そしてペイント弾を撃ち終わると同時に素早くレバー引いて火炎弾を装填し直した。

「ピギヤ!」

ヒプノックはミカンの狙い通りにモモには見向きもせずミカンの方を向く。

「次!」

そう言うミカンはスコープを覗きこみヒプノックの小さな頭部に狙いを付けるとすぐさまメラルーラグドールの引き金を引く。

5発の火炎弾がヒプノックに着弾する度に炎が巻き上がる。

「ピギヤア!!」

ヒプノックが頭部に撃ち込まれる火炎弾をモノともせず唸り声を上げながらその強靱な脚をバネのように使いながらミカンに向かって飛び掛かってきた。

「うわっ!」

ミカンは突然の事に驚きながらもどうにか横向きに前転しながら回避する。

ヒプノックが飛び掛かりながらもミカンが回避した所を確認し、小さくジャンプしながらミカンが逃げた方に体を向けるとそのまま再び飛び掛かってきた。

「クツ……………」

ミカンはコレを回避直後の硬直で動かなくなっている体を無理やり捻って避ける。

ヒプノックも今度は避けられた事に気づかなかったのかそのままもう一度前に向かって飛び掛かる。

ヒプノックは着地すると何も無い所で威嚇行動をしている。

「オニヤアアアア！！！」

モモが再び無防備な姿を晒さらしているヒプノックに駆け寄りタルハンマーを振りかぶるとそのまま背中に向かって振り下ろす。

しかしヒプノックはタルハンマーの一撃にも怯む事無く振り返り両の瞳でモモを捉える。

標的をミカンからモモに変更したようだ。

「ピギヤア！！！」

ヒプノックは一声上げるとイヤンクックが火炎ブレスを吐き出す時のように首を後ろに引くとそのまま勢い良くモモに向かって何か白っぽい物を吐きかけた。

モモはその白っぽいブレスをモ口に喰らってしまった。

「ニヤフウ……………」

するとモモの全身から一気に力が抜けてそのまま地面で丸くなった。

「……………スー、スー……………」

良く見てみると寝息を立てている。

どうやら眠ってしまったようだ。

「モモ！？ ……もしかして今のが睡眠ガス？」

ミカンは相棒のピンチに心配しながら今の攻撃の正体を確認する。

「……………と、そんな事より早くモモを起こさなきゃ……………」

ミカンはそう言うと再びレバー引きペイント弾を装填した。

そしてスコープを覗きモモに標準を合わせるとすぐに引き金を引く。

「ニヤフツ！ ニイ……何か臭うニヤア……。 ……一体ニヤにが起きたニヤ〜??」

モモは気持ちよく寝ている所にいきなりペイント弾を当てられてパニックになっている。

「クルルル……」

その時ヒブノックが脚に力を入れながら姿勢を低くした。

この動きは先ほどにも見た物……飛び掛かり攻撃をする前兆の動きだ。

「モモ！ 飛び掛かりが来るよっ!!」

それにいち早く気が付いたミカンは切羽詰まったように注意の声を飛ばす。

「ニヤニヤ!? つてヤバツ!! 逃げるニヤ!」

モモは反射的に後ろを振り向き状況を理解すると四足走りで一目散に逃げ出した。

「ピギヤア!!」

ヒブノックが先ほどまでモモが居た場所に向かって勢いよく飛び掛かる。

ヒブノックはモモの動きに気づいてかそのままモモが逃げた方向に向かって連続で飛び掛かりを繰り返す。

いずれもモモはギリギリの所で届かず四度目の飛び掛かりで動きが止まり先ほどのように威嚇行動をし始めた。

「チャンス!」

ミカンは威嚇が始まったと見るや否やすぐさまメラールラグドールに火炎弾を装填して撃ち出す。

狙いはもちろん頭だ。

「ピギヤアア!!」

五発目の弾丸が命中すると同時にヒブノックが悲鳴を上げながら怯む。

頭部は殆どのモンスターにとって共通の弱点だがヒプノックには特に効果が大きいらしい。

「まだまだ！」

ミカンはヒプノックが怯んだスキを見逃さず更に連続で頭部に火炎弾を撃ち込んでいく。

「ピイギャアー！！」

しかし一度怯んだのにすぐにまた怯む訳もなく今度はミカンに向かって飛び掛かり攻撃を始めた。

口元を見てみれば白いガス……睡眠ガスが漏れている。

「クツ……」

ミカンはこの攻撃を右に向かって回転回避をする事でどうにか避ける。

「もう一回！」

ミカンは前転し終わると起き上がろうともせずにもう一度前に向かって転がる。

先ほどから何度も見たヒプノックの飛び掛かり標的の方に軌道修正しながら何度か連続して飛び掛かってこれるようだったからだ。

さすがにヒプノックもコレには対処できなかつたのか二度目の飛び掛かりをしてミカンから少し離れた場所に着地するとそれ以上飛び掛かるうとはしない。

（またチャンス！）

ミカンはそう考えると急いで起き上がりスコープを覗きこんだ。

先ほどまで見た飛び掛かり攻撃はその直後必ず威嚇行動に移っていた。

ならばまた攻撃をするチャンスだと思つたのだ。

しかし……、

「????? な、何でいないの？」

ミカンが素っ頓狂な声を上げる。

なぜなら覗いたスコープの中にはヒプノックの姿が捉えられなかつたからだ。

「……一体どこに……。」

ミカンがこの状況に焦りながらスコープから目を離した。その瞬間地響きを鳴らしながらミカンの目の前にヒブノックの体が飛び降りてきた。

どうやらミカンがスコープを覗こうと目を離れた一瞬の内に飛び掛かってきたようだ。

「な、なn……。」

ミカンは訳も分からずにただただ驚いている。

そのスキにヒブノックがミカン目掛けて飛び掛かってきた。

「ガハッ……。」

ミカンの体がヒブノックに蹴り飛ばされて吹っ飛ぶ。

「ミカンッ!!！」

モモは相棒の名前を叫びながらその相棒の元に駆け寄る。

「ピギヤアアア！」

ヒブノックは厄介な相手に一撃加える事ができた事に満足したのか飛び掛かりをするとすぐに翼をはためかせて別のエリアに向かって飛んでいった。

「ミカン、大丈夫かニヤ？」

モモがミカンの元に到着し心配そうに聞く。

するとミカンが顔をしか曇めて苦しそうにしながらもどうにか起き上がった。

「……アイタタタ……やっぱリアノ脚で飛び蹴りされたら流石に堪えるわ……。」

ミカンはモモに心配かけまいとおどけながら答える。

「思ったよりマシそうであったニヤア。……今、笛吹くからちよつと待つニヤ。」

モモはそう言つと背中に背負っているタルの中から金色の縁取りがある緑色の角笛を取り出し吹きはじめた。

ピロピロピロ〜、ピロピロピロ〜

心地の良い不思議な音色が辺りに響く。

すると苦しそうなミカンの表情が少し和らいだ。

今のはモモが覚えているオトモスキル 真・回復笛の術 の力だ。
このスキルは通常の回復笛よりも強力なアイルー族秘伝の笛の力に
より体力を大きく回復する力がある。

「……………モモ、ありがとう。 ……少し楽になったし後は一端ベース
キャンプに戻ろう。」

ミカンが静かに言う。

モモも無言のまま頷き二人揃ってベースキャンプへ歩き出した。

ベースキャンプにて……………、

「ふい〜……………危なかった。 ……ヒプノックの飛び掛かりは注意
が必要なのはこう言う事か……………」

ミカンがベースキャンプ備え付けのベットに勢い良く飛び込みなが
ら言う。

先ほどとは打って変わってかなり気楽な様子だ。

「イヤイヤイヤイヤ！ さっきまでのシリアスムードは何処へ行っ
たニヤ！？」

モモが思わずと言った様子でツツコミを入れる。

ベースキャンプに来る途中までは暫くシリアスムードのままだった
ミカンも着く頃には完全に回復していたらしく一気に元に戻ってし
まったのだ。

「そんなの別にいいじゃん」

ミカンが物凄く軽い口調で言う。

多分普段シリアスな感じに慣れてないからその反動が出たのだろう。

「まったくニヤ……………」

モモが半ば諦め気味に苦笑する。

「……………ところでミカン……………。これから一体どうするつもりだニ
ヤ？ そろそろ仕掛けるのかニヤ？」

モモは真面目な顔に切り替えるとこれから先の方針について聞いて

きた。

「うーん……まだもうちょっとだけ様子見しない？ 街で聞いた話通りならさっきの攻撃以外はイヤンクックとかイヤンガルガとかみたいな他の鳥竜種と同じハズだけど……。でもまだ他にも隠してる攻撃とかもあるかも知れないし、それにさっきの飛び掛かりと睡眠ガス……いや、睡眠ブレスかな？ とにかくその対策とかも試した方がいいしさ。」

ミカンが今の状況を分析して的確な案を出す。

普段は元気で無邪気な女の子といった様子のミカンだが狩り場では優秀な直観力・洞察力・分析力を発揮して良く的確な判断を下すのだ。

この防具を着てなければ到底ハンターには見えない様な少女がドンドルマで注目される程の優秀なハンターになったのはそう言った類たぐ稀いまれな才能のお陰だったりするのだ。

「分かったニヤ。……でもあの攻撃の対処方ってどんななのかニヤア？」

モモが不思議そうに聞いてきた。

「フフン！ まあ、ちよつと聞いてなつて」

ミカンは聞かれた瞬間ニヤリとして得意気に説明しだした。

「まずあの飛び掛かり攻撃だけだよ……アレって幾らでもこっちの事を追いかけてくると思ってない？」

ミカンが楽しそうに聞く。

「（あ……また始まったニヤ……。別にそんな事考えもしなかったけど取り合えず話に合わせるニヤ……。）うーんと……確かにそう思うニヤア。」

モモがげっそりとした様子で答える。

「でしょ！ けどアレって結構制限多いんだよー！」

ミカンがノリノリで言う。

「……で、その制限って何なのニヤ？」

モモが面倒くさそうに聞く。

質問しないと話が進まないと思ったのだろう。

「うん　その制限するのは跳べる向き回数とその後のスキの事なんだよ！」

「向きに回数にスキ……かニヤ？」

ここに来てやっとモモが本当に不思議そうに聞く。

「まず向きについてだけど……アレってかなり広範囲に向かって飛ぶ事ができるけど自分より後ろには跳べないんだよ！」

ミカンが自信たっぷりと言った様子で言う。

「へ……なるほどニヤ……。」

モモもやつと感心した様子になった。

「まだまだコレだけじゃないよ！　さっき言った回数とスキつてのがあるけど回数は今の所最高で四回、その上何回か以上……多分三回以上跳ぶと癖か何かで威嚇するみたいなの！！」

ミカンがコレでもかと言うほどのテンションで言う。

「ニヤニヤ！？　……と言う事は三回以上跳ばせる度に絶好の攻撃チャンスになるのかニヤ？」

モモもノリノリな様子で聞く。

このパターンの場合はいつも最初のうちは面倒くさそうにしていたがだんだん慣れてきて同じような調子になっていくらしい。

「ま〜そう言う事だね〜」

ミカンがエツヘンと言った様子で答える。

その後二人はそれから暫くの間そのまま作戦会議(?)をし続けた。

ところ変わって……、

現在ミカン達が居るのはこの狩場の北にあるエリア・エリア4に来ていた。

このエリアは北側を見ると一面バテユバトム樹海の北西側に広がる湖がとなっており視界を遮る木や茂みなども殆ど無い為この狩場の中では最も視界が開けた場所と言える。

ヒプノックは先ほどと同じようにその湖の方を向いてたたずんでいた。

「一撃加えたから相手（ミカン達）も諦めただろうと思っているのか
警戒心はまったく感じられない。」

「……うくん……コレってここじゃなかったら絶好のチャンスだったんだけどなあ……。」

ミカンがヒプノックにバレないように小声で言う。

先ほども言ったようにこのエリアは視界がかなりいい。

だが視界が良いと言う事は戦闘になれば動きやすく有利だがその代わり隠れながら奇襲などの戦略も使えなくなると言う問題もあるのだ。

「まあ考えても仕方ないか……。……こうなったらちよつと危険
だけどモモはヒプノックに可能な限り接近して。アタシはモモが
バレたらすぐにLv1通常弾撃つて援護するから。」

ミカンが作戦を言う。

ちなみに火炎弾よりも威力の低いLv1通常弾を選択したのは飛距離的に火炎弾では無理があったからだ。

「ニヤ？ それは別にいいけど閃光玉の有効時間の確認をするんじやなかったのかニヤ？」

モモが聞いてくる。

さっきの作戦会議（？）の時について閃光玉についても調べると言う話になったのだ。

「うん。だから一撃入れたらすぐに閃光玉を投げつけるつもりだよ。……一撃だけ……ね……。」

ミカンが小声ながらも殺気を込めて言う。

先ほどはあまり気にしてないように見えたが意外と飛び蹴りを喰らった事を根に持っているようだ。

「……まあいいけどニヤ……。……じゃあ、行って来るニヤ。」
モモはそう言うとしやがみ込んで息を殺したままヒプノックの方に向かって進んでいった。

距離がが除々に縮まっっていく。

……20……15……10……9……8……7……6……残り5m近くまで近づいた所で異変に気が付いたヒプノックが此方を振り向いた。

「……ッ！ バレたニヤ！ ミカン頼むニヤ！」

モモが後ろを向いて相棒を促がす。

「分かつてる！」

ミカンはそう返すと同時にメルルーラグドールを構えてヒプノックに弾丸の雨を喰らわせる。

しかしヒプノックは痛くも痒くもないと言った様子で飛び掛かりをしようと体に力を入れた。

「……ッ！ さすがにコレだけの距離でLv1通常弾じゃ殆ど効果は無いか……。………だったら!!！」

そう言うときミカンはポーチに手を突っ込む。

閃光玉を探し当てるとすぐさまヒプノックの目元目掛けて投げつけた。

「ピギヤアアアアア!!？」

ヒプノックは突然強烈な光により自分の目を焼ける様な痛みが襲った事に悲鳴を上げる。

さすがに距離がある為か目前とまではいかなかったものの視界を奪うには十分だったようだ。

「ピイイギヤアア！ ピイイギヤアア！」

目の痛みか視界が見えない事への苛立ちか分からないがその場に留まったまま物凄い勢いで体ごと回転しながら尻尾を振り回す。

この動きはヒプノックやイヤンクックに限らず数々の飛竜もする有名な攻撃だ。

「コレなら問題無し！ モモはアノ脚に踏み付けられないように気を付けながら打撃を加えて！ アタシは火炎弾で頭部中心に撃ちまくるから！」

ミカンが弾丸の威力を上げようとヒプノックに走り寄りながら指示を飛ばす。

「分かったニヤ！ ……でもまだ目が見えない状態でどう動くか判
つてないだからそつちも気を付けるニヤ！」

モモがミカンの事を心配しながらもヒプノックに走り寄り指示通り
注意しながらタルハンマーで脚を殴りつける。

ミカンもメラルーラグドールのレバーを引いて火炎弾を装填し直す
とスコープで狙いを付けながら撃ちまくる。

しかしある程度攻撃していると突然ヒプノックが首を後ろに引く。

「ヤバッ……。」

ミカンはそう言うで大急ぎでヒプノックの正面から側面へ逃げる。

「ピギヤアー!!」

直後ヒプノックがクチバシを開きながら体全体を勢い良く前に突き
出すようにしながら睡眠ブレスを吐きだした。

しかも先ほどとは違い前に吐き出しただけではなくそこから素早く
右・左と合計三発の睡眠ブレスを連続で放つ。

その上ミカンが逃げた場所は運悪く三発目射線上になっていた。

「……クッ！」

ミカンは全力で動いて強張った体を無理やり捻って避ける。

睡眠ブレスはミカン頭上をギリギリかすめていった。

「あつぶな〜！ あんなパターンもあるのか……。 ……つてか今
のつて狙つてやったのかな？」

ミカンはそう言うとき急いでヒプノックの姿を確認する。

顔を見た所その小さな頭に似つかわしい碧あおく小さな瞳はまだ目蓋まぶたの
下にあった。

この様子なら多分まだ閃光玉の効果はあるのだろう。

「……ふう……。」

ミカンが安堵の息をつく。

「ピギヤアアアー!!」

しかし次の瞬間さつきまで閉じていたヒプノックの目蓋が「カツ！」
と見開かれた。

安心したのも束の間、どうやらヒプノックは閃光玉の効果から復活

したようだ。

「……効果は大体20秒か……。」「
だがミカンは突然のこの状況にも動じず冷静に閃光玉の効果時間を確認した。

狩りになると本当に人が変わったように見える。

「モモ！ 閃光玉もつかい投げるよ！！」

ミカンはそう言うとポーチの中を探りもう一度閃光玉を投げつける。

「ピギヤアアアアア！！？」

ヒプノックも連続で眼を潰された事に驚いて盛大に仰け反る。

「じゃあいくよ！」

「まかせるニヤ！」

二人をそう頷き合うとヒプノックへの怒涛の連撃を開始した。

それから一時間ほど後のベースキャンプ……、

「……ふう……疲れた……。」

ミカンが先ほどベースキャンプに戻った時と同じようにベットに身を投げ出した。

「……ふい……ホント疲れたニヤ……。でもコレで大分ダメージは蓄積したハズだよニヤ？」

モモもベースキャンプの地面に腰を下ろすとおもむろにそう言う。

二人はアレから何度も閃光玉で足止めしながらヒプノックに攻撃を加え続けた。

その結果残った閃光玉は調合分も含めて後3個、弾丸に関して言えば主力の火炎弾は調合分も含めて80発分はあったが残り20発弱しかない。

「うん 閃光玉の消費が多かっただけに多分もう一押し二押しで倒せるよ！」

「二押しって何ニヤ……。」

モモがミカンの言葉に苦笑しながらツッコむ。

「……さて、二押しつてのはとりあえず置いて……そろそろ本格的に留めを刺しに行く？」

ミカンが口調は軽いながらも真剣そうな顔で言う。

「やっぱりそろそろ爆弾とかも持っていくのかニヤ？」

モモが聞いてきた。

「うん、罾と併用して一気に体力を削り取る！」

ミカンが自信たっぷりと言った様子で答える。

「この休憩が終わったら一気にカタをつけに行くニヤ！」

モモが気合い十分といった様子で言った。

「うん！ 多分倒す前にベースキャンプに戻ってくるのはコレが最後だから頑張ろう！」

モモの言葉をミカンもやる気に満ち溢れた顔で答える。

そして現在エリア6……、

ミカン達は爆弾や罾を乗せた荷車を引きながら先ほどブルファンゴと戦ったエリアに来ていた。

エリアの真ん中を見みるとヒプノックがいる。

しかし今回はヒプノックも無防備な姿など見せずにしっかりと待ちかまえていた。

「……さすがに今回は気を抜いてたりしないか……。」

ミカンが苦笑交じりに言う。

「クルルルル……ピギヤアアアア！！！」

ヒプノックはそう一声上げると勢い良く跳び掛かりを始める。

「モモさっき言った通りに頼むよ！」

「任せるニヤ！！！」

ミカンとモモはそう言い合うとミカンはヒプノックの死角へモモは逆に目立つ位置に向かって走り出す。

「ニヤアアアアア！！！！！」

モモが勢い良くヒプノックに接近するとタルハンマーで脚を勢いよ

く殴りつける。

そのスキにミカンは荷車を邪魔にならない平地の端に持っていきその中からシビレ罾の円筒缶を取り出して走り出す。

ヒプノックにバレない程度に近づくと地面にしゃがみ込みシビレ罾を仕掛けはじめた。

二人の作戦とはモモが囷となってヒプノックの気を引いてるうちにミカンが罾を仕掛けるという物のようだ。

「ピィギヤア！」

ヒプノックがクチバシから睡眠ガスが漏れだしている事も気にせず飛び蹴りを繰り返す。

作戦通りヒプノックは完全にモモの動きに集中している。

「モモ、罾仕掛け終わったよ！」

ミカンがエリア中に響き渡るような大声でモモを呼ぶ。

「ニヤ〜ン！」

モモはその声を聞いた瞬間一目散にミカンの方に向かって走り出した。

「ピィギヤア！」

ヒプノックもモモを逃がすまいと飛び掛かりをしながら追いかけてくる。

しかし……、

「ピ、ピィ、ピギヤ、……」

突然ヒプノックの体が硬直して動かなくなる。

シビレ罾に掛かったのだ。

「掛かった！！ 早速爆弾爆弾つと！」

ミカンはヒプノックがシビレ罾に掛かると見るや否や急いで荷車に取って返し積んであった大タル爆弾Gを担ぎ上げてヒプノックの元へ持っていく。

「アタチも手伝うニヤ！」

ミカンの横を見ればモモその小さな体と比べて遥かに大きなタルを持ち上げて一緒に走っている。

二人は急いで大タル爆弾Gをヒプノックの喉元辺りに設置すると大

急ぎで爆発の影響外の場所まで逃げてミカンがメラルーラグドールの引き金を引く。

ドッゴーン!!!!

ミカンが撃ち出したLv1通常弾は設置したタルにぶつかると物凄い爆風と轟音がして吹っ飛ぶ。

「ヒブノックはどうなったニャ!？」

モモが身を乗り出してヒブノックがどれだけのダメージを喰らったか確認しようとする。

爆発が起きた場所は土煙などが舞い上がって見えなくなってるからだ。

「ピ、ピギヤアアア……」

土煙が晴れた視界の先には明らかにボロボロで満身創痍といった様子のヒブノックがいた。

良く見てみればクチバシなど一部欠けている。

「ピギヤアアア!」

ヒブノックがボロボロの体を引きずりながらどうにか翼をはためかせると再び別のエリアに飛んでいった。

エリア7・巨大樹の内部の中にて……、

ミカン達は巨大樹の中に入ってみるとヒブノックが眠っている最中だった。

大型モンスターは体力が限界に近付いてくると一端眠って回復を図ろうとする性質がある。

「……ふう…… やつと片付いたかな？」

ミカンがボソリと愚痴を溢した。

実を言うとこのエリアに入ってみるとランポスとイーオスがそれぞれ2匹ずついたので先ほどまでそいつらを狩っていたのだ。

その上こいつ等は何故かミカンとヒブノックが寝ている所間に割って入るように移動してきた為、折角寝ているヒブノックを誤射しないように気を付けながら討伐するハメになってかなり苦労したの

である。

「……………あゝもうイライラするな……………。……………モモ、大タル爆弾設置するよ。」

ミカンが小声にするように気を付けながらも少々尖った声で言う。
ランポス達の事によっぽど腹が立ったのだろう。

「ミカン、ちよつと落ち着くニヤ。後少して念願の上位昇格なんだからちよつとの事位ガマンするニヤ。」

モモがミカンを窺^{たしな}める。

「う……………分かったよ……………」

ミカンはまだ不満そうだがとりあえずは落ち着いたようだ。
どれだけ狩りの時には冷静でもこつ言う所やっぱり子供だ。

「……………じゃあ引き金引くよ……………」

ミカンが小声で言う。

モモはその言葉に小さく頷く。

ヒプノックはアレだけの状態になっているのだからこの一撃が決まれば一気に決着が着く。

さすがのミカンも緊張しているようだ。

「……………えい!!」

ミカンはそう言うつと勢い良くメラルーラグドールの引き金を引いた。
撃ち出された五発のLv1通常弾は真つ直ぐ吸い込まれるように大タル爆弾に命中する。

ドツカーーン!!

次の瞬間爆弾が勢いよく爆発した。

またもや目の前が土煙で見えなくなる。

「……………どうなったの???

ニヤ?????」

二人の言葉が重なる。

徐々に煙が晴れてくるとその先には完全に力尽きて横たわるヒプノックの姿があった。

「……………これって……………」

「……もしかすると……。」
「「やったの？」

かニヤ?」「」

またもや二人の声が重なった。

二人とも半信半疑な様子でヒプノックに恐る恐る近づいて行く。

「……や、やった……やったああああ!!!」

ミカンが物凄い勢いで歓喜の声を上げる。

「ミカン!!! 上位昇格おめでとうニヤ!!!」

モモも自分の事のように喜んでお祝いの言葉を言う。

正確にはまだ上位には昇格してないのだがそんな事にまったく気付かず二人はハシヤギあった。

樹海でのヒプノック討伐から数週間後……。

「……はいコレでミカンも上位ハンターの仲間入りよ。」
「アプルはそう言う」とミカンにギルドカードを差し出す。

ハンターは上位やG級など大きく階級が上がる時には一度自分のギルドカードをギルドに預けて色々な更新手続きをするのだ。

その為ミカンは狩りから帰ってすぐにギルドカードを受付嬢に預けていたのだ。

しかしミカンは折角上位ハンターになったと言うのに不機嫌そうだし「?」……ミカン? どうしたの、嬉しくないのか?」

アプルも不思議そうにミカンに聞く。

「……だって大長老様直々に行われた上位試験の合格なのに何でこんなにこぢんまりと渡してるんですか……。 ……もうちょっと派手にやってもいいでしょうに……。」

ミカンが膨れっ面のまま言う。

アプルも流石に今の発言にはさすがに呆れたのか物凄く苦々しい苦笑を浮かべている。

「……ところで上位にはなりませんでしたけど後はどうすればギルドナ

イトになれるんでしょうか？」

テールでジューズを飲んでいるウチになんとか機嫌を直したミカ
ンが聞く。

ちなみに今回モモは家で留守番しているらしい。

「……え〜と……。それは〜……。」

アプルが顔に汗を掻きながらどう言うか考える。

「後少しでなれますか？ それとも後もう少しだけ頑張れば何とか
なりますか？ てかもしかしたら明日にでもなれたりしますか？」
ミカンが満面の笑みを浮かべてアプルに詰め寄る。

「……いや〜……。その……。……実は私も良く分かんないのよ……
……。私自身何か気がついたらギルドナイトになってたって感じだ
から……。」

アプルが先ほどとは違った意味の苦笑を浮かべながら言う。

後でミカンが聞いたことなのだがアプルが普通にハンターとしてや
っていた所に突然ギルドの人が来て勧誘されてギルドナイトになっ
たらしいのだ。

その為女性は上位以上にならないとギルドナイトになれないと言っ
事以外分らないらしい。

「そ、そんな〜……。」

ミカンはそう言うつとへなへなと床に座り込んでしまった。

「え〜と……。……でも大長老様直々こう言う事があったならギ
ルドの方には見込みあり思われてるって事だからすぐに話があるか
もよ〜……。」

アプルが無理やりな笑顔で言う。

「ですよねっ！！ じゃあ頑張りますっ！！」

アプルが慰めようと言った一言を聞いた瞬間ミカンが元気良く立ち
上がった。

アプルはこの立ち直りの良さに啞然とさせられながらも頼もしそう
にほほ笑んだ。

「……ところで上位に上がったからにはやっぱり装備も変えるの

？」

「アップルが何気ない様子で言う。」

「はい！ とりあえずまずはクックUシリーズを作ろうと思ってます！」

「ミカンが元気良く答える。」

「クックU？ どうして？」

「アップルが聞き返す。」

「はい！ あの防具は比較的簡単に手に入る素材を使ってる割に見切りと属性攻撃強化がつくからいいんじゃないかと思ったんです！

だから明日にでもイヤンクックU亜種の討伐クエストに行く予定です！」

「ミカンは元気良く答える。」

「ふ〜ん……。ま、頑張りなさいよ！」

「アップルが感心した様子で言う。
すると……、」

「あ！ そう言えばこの後アイテムの足りなくなった買い出しに行くんだっただ！」

「ミカンが慌てたように立ち上がる。」

「って訳でアップルさん、ギルドカードありがとございました！」

「ミカンはそう言うつと元気良く走りだした。」

キャラクター紹介！（前書き）

キャラクター紹介です！

ミカン：「前書き欄でははじめまして！ ミカン・スノウスターだよ」

ん？ ああ、ミカンか……。
何か楽しそうだな？

ミカン：「まあね、
なんせ自分の事の紹介話なんて何か楽しいじゃん？」

何が楽しいんだ？
まあいいか……。

ミカン：「ではではキャラクター紹介イッテみよう」

あ！ それ僕のセリフ！

キャラクター紹介！

名前：ミカン・スノウスター

性別：女

年齢：16歳

身長：152cm

見た目：明るいオレンジ色の短髪（P2G：ウィンドボブ）に黄緑色の綺麗な瞳。顔は常に無邪気な笑顔でいる。体は少々小柄。

武器の種類：ライトボウガン

武器：・蒼桜の対弩 ・メラルーラグドール ・ジエイドテンペスト

防具：クツクUシリーズ

スキル：・見切り+2 ・属性攻撃強化 ・回避性能+1 ・体力

- 10

備考：ドンドルマに住んでいるギルドナイトを目指している少女。無邪気で元気なおてんば娘で口調は軽そうな感じ。

最近上位に昇格したばかりでライトボウガンの実力は相当な物だが若干速射厨の気がある。

更に狩り場では優秀な直観力・洞察力・分析力を発揮して良的確な判断を下す事ができる。

ギルドナイトになりたがっているのはギルという名の師匠が関係しているようだが……。

名前：モモ

種族：アイルー（ ）

毛並み：桜

武器：タルハンマー

性格：勇敢

防具・服装：どんぐりメール・コックコート

オトモスキル：真・回復笛の術、 改心攻撃の術、 七転び八起き

の術、

得意食材：肉 酒

キツチンスキル：ネコの運搬の超人 ネコの射撃術 ネコの調合術

【小】

備考：勝気な性格をした雌のアイルー。

基本はツツコミだが割と良くボケたりする。

ライトボウガン使いとコンビを組んでるオトモアイルーには珍しく
援護より攻撃に重点を置いた動きをする。

基本的にはオトモアイルーとして活動しているが料理もまずまず得意なのでキツチンアイルーも兼業している。

ミカンとのコンビは結構長いがミカンがギルドナイトを目指してる理由については詳しくは知らない（詮索しようと思っただ事がない）。

名前：アプル・ホワイトツリー

性別：女性

年齢：25歳

身長：181cm

見た目：艶やかな光を放つ真っ赤な髪（P2G：レイアレイヤー）
に綺麗なクリーム色の眼をした長身の女性。

武器の種類：ガンランス

武器：シザーキャノン

防具：ギルドガードスーツ紅シリーズ

スキル：・神の気まぐれ ・幸運 ・運搬の達人

備考：男性が多いギルドナイトでは珍しい女性ギルドナイト。

ミカンとはモモ以上に長い付き合いでミカンにとってはお姉さんの様な存在。

ミカンの師匠であるギルとは知り合いだったようだが……。

名前：ギル・????

性別：男

年齢：???歳

身長：?????cm

見た目：?????

武器の種類：?????

武器：?????

防具：?????

備考：今は何も明かせないミカンの師匠。

ハンターとしての実力は相当なモノだったらしい。

キャラクター紹介！（後書き）

……てな訳で『ギルドナイトを目指して』のキャラ紹介でした！

ちなみに新しいキャラが登場する度に此処に追加していく予定もあります！

1・アプルからの依頼？（前書き）

どうも、風の双剣使いです！

0話が終わって早速第1話です！

まあ短編の方を読んだ事がある人には此方の方が始まりですかね？

今回はこれから始まる話にも書いています上位試験から2ヶ月後の話になります！

そして今回は初めからいきなりの原作離れの展開有り！

正直いきなりそんな展開はマズイかとも思ったんですが……、
過ぎた過去を振り返っても仕方ありません！

それでは第一話始まります！

1・アプルからの依頼？

ミカンがヒブノックを狩って上位に昇格してから約2ヶ月後

……、

チウンチウン、チチチチチ……

何処からか小鳥さえざる音がする。

現在早朝……時刻で言えば大体6時ぐらいだろうか。

此処はドンドルマの街のある住宅街だ。

辺り一帯の家々はすべて屋根や壁が緑色に塗られるなどの装飾がなされている。

更にこの街ではこの辺りには見当たらないが大老殿やそれに関係する公の施設になると赤い装飾がなされている。

これはハンターならば誰でも知っているであろう強大な力を持つ飛竜・リオレウスとリオレイアと言う番のモンスターつがいの体色から来ている。

自然への感謝や畏敬いけいの念を込めて一般の住居などには緑、公的な役割を持った施設などの建物には赤の装飾を施すとの事なのだ。

ちなみに区域によっては壁や屋根の一部が申し訳程度に塗られているだけの所などもある事に対してこの周辺は壁一面や屋根全体、あるいは家の外装全てが緑色に装飾されていた。

コレは特にこの辺りがドンドルマの街の中でも比較的裕福な家が多く集まっている区域だからだろう。

その住宅街のとある家、

この家は総石材造りの一階建てで屋根はもちろん緑色に塗装されている。

なかなか大きさのいい家だ。

それでもこの区域の中では比較的小さめなのだが……。

その家の中の一室……、

「……ん……うん……？ ……ん、ん……」。そう呻きながらベットの上でオレンジ色の短い髪の少女・ミカンが大きく伸びをしながら起きる。

シーツの下から出てきたのは普段防具の下に着込んでいるマカライトブルーと呼ばれるインナーを着た姿だ。

暫くボーとしていたかと思うと急に目をパツチリと見開き、おもむろにベットの脇の棚の上に置いてある赤黒い甲殻の様な物で作られたペンダントを掴んだ。

「……師匠、おはようございます……今日も頑張って狩りをしてきます。」

そしてペンダントに向かってそう呟く。

すると……、

「ミカン、起きたかニヤ〜！」

ミカンのパートナーであるアイルールのモモがそう言いながら部屋に入ってきた。

しかしその姿はいつものどんぐりメールではなく清潔そうな純白のコートとコック帽を着て、首には赤いスカーフをオシャレな感じに巻いている。

一般的にコックコートと呼ばれるキッチンアイルールの制服だ。

どうやらモモはオトモだけではなくキッチンも兼業しているらしい。

「へっ？ う、うん、お、起きたよ〜。」

ミカンは動揺した様子でペンダントを元の場所に戻しながら返事をした。

「起きてたのニヤ？ それなら早く顔洗って居間に来るニヤ！ 朝

ご飯はもうできてるニヤ！」

モモはその様子に気付いてか気付かずか平然としたまま言う。

「うん、分かった！ じゃあ顔洗ってすぐ行くからちよつと待って〜。」

ミカンはそう言うとベットからゆっくりと降りる。

それから1時間ほどして……、

ミカン宅のとある一室にミカンの姿があった。

「うん……持ってくアイテムはこんな感じでいいのかなあ？」

洗顔をし朝食を食べ終えたミカンは家の一角の武具・道具倉庫と化した部屋の中で首を捻っていた。

その姿は先ほどのインナー姿ではなく、鎖帷子くさいがたひらの上に綺麗な翡翠色つばきをした甲殻を重ねた物をオレンジ色の飾り紐で締め付けた防具・クツクUシリーズに変わっている。

そして部屋の中に幾つかある棚の内の一つの脇には1丁のボウガンが立てかけられていた。

銃身はユニオン鉱石できておりそこに翠水竜の上鱗で覆い、銃口は翠水竜の上ヒレを使った弾丸装填の機構がある。

その名はジェイドテンペスト……ほぼ全て弾丸が装填可能で特にV2通常弾なら速射も可能と言うどのような局面でも的確に対処できる優秀なライトボウガンだ。

「でもホント何でこんな事になったのかなあ？」

ミカンはそう言いながら事の発端となった昨日の出来事を思い出していた……、

時間は前日のお昼頃まで遡る……、

「え!!!? アタシをギルドからの依頼に参加させてくれるんですか!」

ミカンがテーブルから身を乗り出して聞いた。

「しー。声が大きい。」

ミカンの声に慌てたアプルが人差し指を口元に当てて静かにするようにと注意をする。

ちなみに此処はドンドルマの街の大衆酒場で二人が座っているのは酒場の端っこの目立たないテーブルだ。

「一応あたしの判断次第では話しても構わないとは言われてるけど……それでもこの依頼はまだ事実かどうか判明してない情報を調べ

るって依頼なんだからね。だからこの話はできる限り一般のハンターには知られちゃまずいのよ。」

アプルはそう説明すると辺りを見渡した。
今がお昼時である為か酒場の中には昼食を食べに来た一般人が多くハンターの姿は少ない。

その為今の話を聞いていた者はあまりいなくいても殆ど気にしてないような一般人だ。

「……でアプルさん、今回の相手は何なんですか？もしかしてさっきの話からする新種のモンスターだったりします？」

ミカンが声を潜めながらもワクワクと言った様子で聞いた。

どうやら今まで見た事のないモンスターが見れるかもしれないと楽しみにしているようだ。

……しかし、

「いや、新種のモンスターではないよ。今回の相手はデルマイオスって言う鳥竜種モンスターよ。」

アプルは周りに聞こえないように小声で言う。

「デルマイオスですかあ？」

するとミカンが不満そうな顔で言った。

「ああ、奴等は個体数があまり多くないから私自身狩った事はないんだけど……もしかしてミカンは狩った事あるの？」

アプルが問いかける。

「まあ一応狩った事がありますよ。でもかなり弱いですよ？」

ミカンがまだ不満そうな顔で説明を始めた。

その説明によればデルマイオスはこの間狩ったヒブノック以上に体が羽毛に埋め尽くされたモンスターで鳥竜種にしてはかなり高い飛行能力を持っているらしい。

その飛行能力はリオレウスほどとまではいかないもののそれに近い實力はあるそうだ。

「……でもそれ以外の能力はイェンクックにも劣るし何よりもブレスを吐いてくる事もないし……下手をすればイェンクックよりも弱

いですよ？」

ミカンが慥然とした顔のまま言う。

「なるほどな……『普通』はその程度の小物って事か……。」
アプルが小さくそう言う。

「？ ちよつと待ってください。『普通』はってどういう事ですか？」

ミカンが違和感を覚えて質問する。

「ん？ まあちよつとね……。実は今回のデルマイオスは今までに見つかっている個体とはかなり違う奴らしいのよ。」
そう言つてアプルはミカンに意味有り気な視線を向ける。

「今までとは違う個体？ それってどういう事ですか？」
ミカンが不思議そうに聞く。

「ミカンが狩った事のあるデルマイオスってのは多分クックより一回り小さいぐらいの大きさよね？」

「ちよつと待つて下さい今確認しますから……。」
アプルの問いかけを聞きミカンは自分のギルドカードを取り出して確認しはじめた。

ギルドカードには自分が今まで狩ってきたモンスターの数や大きさなどの情報が記載されている。

それを使つて大きさを調べようとしたのだ。

「……うん……あ、あつた！……うん、確かにそのぐらいの大きさですよ。」

ミカンはそう言つとギルドカードをしまう。

「でしょ？ だけど今回発見されたデルマイオスによつて今まで発見されていたデルマイオスは幼体かもしてないって話がでてきたのよ。今回発見されたのが成体で大きさも少なくとも幼体の倍以上はあるらしいわよ？」

「デルマイオスの成体！ ってかアレの倍以上ですか！？」
アプルの言葉にミカンが驚いたような表情になる。

「うん、ギルドからの話によると最近アカマーヤの街……だっけ？

その街の近くの沼地で3人組のハンターが討伐したのが一番初の発見例らしいの。……で、その話によると討伐にはガンナーの存在が大きかったらしいのよ。」

「……なるほど、だからアタシに声をかけたんですね？」
ミカンが納得したように言う。

「まあそう言う事よ。と、言う訳で手伝ってくれない？」
アプルは軽い口調でそう言う。

「うーん、正直あんまり気は乗らないけど……うん！ 分かった、手伝います！」

ミカンは少し考え込んだあといつもの元気な笑顔で頷いた。

「ありがとうミカン。じゃあ出発は明日だからよろしくね！」
アプルはそう言うと言席から立ち上がる。

「あ、そうそう！ 弱点属性は幼体と同じとは限らないからできる限り色々な属性弾撃てるボウガン持ってきてね。」
そう付け足すとさっさと酒場から出て行った。

時間は戻ってミカンの家の倉庫……、

「……幾ら成体で大きいって言ってもあのデルマイオスじゃあなあ……。」

ミカンが面倒くさそうにそう言う。

手伝うとは言ったモノのデルマイオスではやはり物足りないようだ。
「うー……まあ考えてもしかたないか……。もう一回アイテム確認しよ！」

ミカンはそう言うと言ポーチの中に入れたアイテムを取り出し始めた。
「まずは基本のアイテムとして回復薬・回復薬グレート・こんがり肉・ペイント弾・秘薬……それに調査書は？？でいいかな？ 弾丸は使いやすいLv1・2通常弾、調査の為に各種属性弾、援護用にLv1・2回復弾、あと大きいって話だったからLv3貫通弾も持って行くこと……。あとは足止め用の道具類としては閃光玉

は効かないからシビレ罨と落とし穴、それにシビレ罨の素材として
トランプツールとゲネポスの麻痺牙……。」

と言ってポーチからアイテムを出し続ける手を止める。

どうやらコレで全部らしい。

「うーん……もう少しだけ持つてく余裕あるけど……。 ……でも
少しぐらい余裕があった方がいいだろうしこんなものかなあ？」
ミカンはそう言つと出したアイテムを再びポーチの中にしまつてい
く。

ただし罨類はさすがにポーチには入りきらないのでそのままだ。

「……アプルさんもそろそろ酒場に行つてるだろうしアタシ出よう
！」

ミカンはそう言つて立ち上がると棚の脇にあるジェイドテンペスト
を背負つて玄関へと歩き出した。

1・アプルからの依頼？（後書き）

と、言う訳で初めの話からいきなりマンガオリジナルモンスター・デルマイオスの登場です！！

その上書きやすいように少し能力などを勝手に追加・変更したりしてます。

ちなみに作中でチラッと触れたデルマイオスを討伐したハンター達と言うのはマンガ『モンスターハンター オラージュ』で主人公達がデルマイオスと戦った話の事です。

もし良かったら其方の方も読んでみてはいかがでしょう？

そして次回からは遂にそのデルマイオスが登場！

デルマイオスの描写などは頑張って原作（マンガの方）に少しでも近くなるように書きたいと思います！

2・旧沼地のデルマイオス(前書き)

第2話投稿!!

ミカン：「うゝ……。」「

ん？ どうしたミカン？

ミカン：「……。やっぱり納得できない!」

な、何が？(汗)

ミカン：「何が？……。って、そんなの決まってるじゃん！ 1ヶ月
周期投稿の事だよ!」

し、仕方ないだろ!

こっちは飽くまでサブ連載なんだからさあ。

ミカン：「でもアタシだってもっと話に出たいもん!」

「出たいもん」って(汗)

まあ今度は少しでも早く投稿できるように頑張るから今回はガマン
してくれないか？

ミカン：「ホント!! ならOKだよ」「

凄く変わったなあ(汗)

ではでは最新第2話「旧沼地のデルマイオス」どうぞ！

「ミカン…」どうぞ〜

2・旧沼地のデルマイオス

目の前に広がるのは一面の灰色世界。

養分などの殆どないやせ細った大地、空には雲が厚く掛かり昼夜問わず常に薄暗く、生物の気配も疎^{まば}らにしかなく死のイメージを与える場所だ。

ここはジオ・テラート湿地帯、通称 旧沼地 と言う呼び名でハンターズギルドが狩り場として指定されている土地だ。

なぜこのような場所が狩り場に指定されているかと言うと特殊な菌糸類……つまりアオキノコやドキドキノコ珍しいキノコ、ライトクリスタルなどのクリスタル系鉱石を中心に数々の種類の珍しい鉱石などの貴重な資源が意外と豊富に眠っていると為、それらが必要とする者たちがハンターに採取などを依頼する為などの理由がある。

その狩り場のエリア2で二人のハンターの姿があった。

一人は前に出てキビキビと歩き、もう一人がその後ろをダラダラとついて行くという構図である。

「う〜、何かじめじめする〜。 ……アプルさん、アタシやっぱりここの狩り場は苦手です……。」

二人の内後ろで歩いている方のハンター……ミカンがうんざりとした様子で言う。

どうやら湿地帯独特の湿気が嫌でダレているらしい。

「……それ言ったの何回目よ？ ほらほら、そんな事言っただって湿気は無くならないんだからテキパキと歩く！」

前を歩いていた方のハンター……アプルがミカンの方を振り向いて苦笑しながら励ます。

まあその励ましもミカンの旧沼地苦手宣言と同じで何度も言ってるものだからいい加減効果は無くなっているようだが。

ちなみに二人の装備だが、ミカンは自分の部屋で纏っていたのと

同じクツクUシリーズにジェイドテンペスト。

アプルの方は酒場でも防具の方は着ていたギルドガード紅シリーズなのだが、背中には酒場には持ってきて無かったある武器が背負われていた。

とても強固な甲殻で体を全体を守っている甲殻種として有名なモンスターである盾蟹・ダイミヨウザミの爪や甲殻をふんだんに使って造られた巨大な槍に強力な火力を発揮する素材である 火竜の延髄 を組み込んで砲撃能力を持たせた武器、更に右腕には槍にも使われている盾蟹の堅殻を使って使って造られた強固な守りを誇る盾を持っている。

強力な破壊力と強固な守りを同時に備えた強力なガンランス・シザーキャノンだ。

「……それにしても本当にこんな所にデルマイオスがいるんですかねえ。」

まだダルそうにしているミカンが少し不思議そうに聞く。

「ん？ どうしてだ？」

アプルは少し難しい顔で聞き返す。

ミカンの言い方に何か引つかかる物を感じたようだ。

「だって普通デルマイオスが生息しているのって森丘とか旧密林みたいな沢山の木々が生い茂って命の気配が溢れかえってるような場所なんですよ？ それなのにこんな死の世界にみたいな場所に生息してるんでしょうか？」

ミカンがさっきの言葉の理由を説明した。

「なるほどね。 あ、そうそう！ ミカンはデルマイオスがそれ以外の狩り場で目撃されたって話は聞いた事ある？ 例えば……テロス密林とか？」

アプルは納得したかと思うとその後何かを思い出した様に質問してきた。

「？ 旧じゃない方の密林……ですか？ うん……そう言えば聞いた事無いですね？ ……あ、そう言えば前に旧砂漠で討伐した八

「……アタシそんな話聞いてないからホットドリンク持ってきてないんですけど……。」
「アプルが必死で弁解しようとするのをミカンが悲しい声で遮る。その後数秒ほど場の空気が洞窟からの冷氣以外の力で凍る。」
「え……ホントに……?」
「……はい……。」
アプルが多少混乱気味な頭でなんとか捻り出した質問にミカンが消え入るような声で答える。
「……あ……。……なんていうか……ホントゴメンね……。」
「……はい。」
「え……と……あたしのホットドリンク使う?」
「……頼みます。」
そんな会話をした後、ミカンが貰ったホットドリンクを飲んで二人一緒に洞窟の中へと入っていった。

それから一時間ほど後、

「あ……もうヒマあ……! 洞窟によく出没するって話はなんだったの……!」

ここは旧沼地エリア7の洞窟、その中でミカンは明らかに怒った様子で絶叫していた。

「洞窟全部回ったのに全然居ないじゃない!?」

ミカンが尚も怒った様子で叫ぶ。

ちなみにここは洞窟内なのでその叫び声は壁に反響してかなりうるさい。

「……つう、……ちょ、ちょっとミカン、少し静かにしない?」

アプルが多少苦しそうな様子で言う。

もちろん手は耳を塞いだ状態で。

「だって……」

ミカンが不満をありありと浮かべた顔でアプルを向き直る。

現在こんな状態になっているのは何故かと言うと、ミカンも先ほど言っていたように単純にエリア7・8・11の3エリア……つまりこの狩場にある全部の洞窟に行ってもデルマイオスが出てこなかったからだ。

……ただ、ミカンがここまでキレてる理由はそれだけではない。

「まあ確かに今まで移動だけだったし暇って気持ちも分かるけどね。……て言うかホントにモンスターの気配がないわねえ？ ここに来るまでもカントロスとランゴスタが数匹ぐらいしかモンスターも出てこなかったし……。」

アプルはそう言うのと急に険しい顔になる。

確かにこの狩場は生物がするには少々厳しい環境である為森丘や密林などの狩り場に比べれば生き物はそれほど多くはない。

それしてもカントロスにランゴスタ以外のモンスターがまったたく出てこないと言うのは明らかに不自然だ。

すると……、

「アプルさん静かにしてください。」

ミカンは小さな声で当然そんな事を言い出した。

「ちよつと！ うるさくしてたのはそつちzy……。」

アプルが理不尽だと思いつつ振り返って言葉を止めた。

ミカンの表情は真剣そのものだったからだ。

「……どうしたの？」

アプルも声を潜めた状態でなぜ突然静かにするように言ったかを聞く。

「上にフルフルがいます。」

「え？」

アプルはミカンの言葉を聞いてから上を見る。

すると洞窟の天井には白い何かぶら下がっていた。

「確かにフルフルね……。」

アプルがその姿を見て納得すると二人揃ってしゃがみこむ。

「見た感じまだこつちには気付いてないみたいですが……まあ時間

の問題ですかね？」

ミカンが声を潜めて言う。

「……フルフルね。……なるほど……そう言う事ね？」

アプルは納得したように頷く。

「なるほど……ですか……。……どう言う事です？」

ミカンが不思議そうな顔で聞く。

「ほら、さつき小型モンスターに殆どいないって話したじゃない？

もしギルドの調査通りデルマイオスがこの狩り場いるなら、目の

前にいるフルフルも含めて今この狩場には二体の大型モンスターが

いるって事でしょ？ さすがに大型モンスターが二体もいるなら小

型モンスター達も警戒してどこかに逃げたんじゃない？」

アプルが身振り手振りを交えながら説明した。

「なるほど、そう言う事ですか。」

ミカンもさつきの説明で納得したのか小さく頷く。

「フヴォ？」

その直後、フルフルは何か異変を感じたのか突然殆ど口しかない不

気味な頭を動かしてはじめた。

「匂いを嗅いでる？」

「って事はこつちに気付いたの？」

アプルとミカンは身構える。

フルフルには目がない。

その為視覚ではなく嗅覚で色々な物の位置を探るのだ。

「フヴォウ！」

此方に位置に気が付いたフルフルが　バシャリ　と言う音を立

てて水溜りの上に跳び下りる。

「あゝあ、もう気付かれちゃったよ。……ホントはデルマイオス

の時の為に弾丸節約したかったんだけどなあ。」

ミカンは苦笑しながらそう言う。

「もう、そんな軽口聞いている場合じゃないでしょ？」

アプルも注意しながらも顔にはミカンと同じように笑みを浮かべて

いる。

「じゃあ、」

「いきますか？」

二人はそう言い合うと左右に散開して走り出した。フルフルも迎え撃とう身構える。

……その時、

「グアアアアアアア！」

鳥竜種独特の喉から響くような鳴き声が洞窟の外から響いた。

バサ、バサ、バサ、バサ

その鳴き声聞こえるとほぼ同時に何かか翼をはたかせる音が聞こえ始める。

「フヴオ!？」

フルフルが鳴き声とともに慌てだす。

「え？ フルフルが慌てだした？ どう言う事？」

フルフルの予想外の行動にミカンもうるたえる。

ドゴオン、ガラガラガラ

物凄い音がして洞窟の一部が崩れて巨大な何かが入ってきた。

「何アレ!？ もしかしてデルマイオスなの!？」

ミカンが瓦礫が崩れて舞い上がった砂煙の中にある影を見て絶句する。

以前にも話した通り普通デルマイオスはイヤンクック程度の大きさしかない。

しかしこの影を見た限りではその大きさは約20m……グラビモスやディアブロスなどの巨大飛竜に匹敵する大きさだったからだ。

「グアアアア！」

砂煙の中のデルマイオスと思しき巨大な生物が再び鳴き声を上げてなにかを吐き出してきた。

土色をした油土のような液体だ。

その液体は真っ直ぐフルフルに向かって飛んでいく。

「フヴオ……オ……」

油土がフルフルに降り注ぐ。

その瞬間　パキパキ　と言う音がして油土が掛かった部分が見るみる岩石のような灰色に染まっていく。

「……アレが……石化プレス……なの……？」

目の前の光景を見てアプルが呟く。

「石化……プレス？　何ですかそれは？」

ミカンが緊張を解かないままで聞く。

「ギルドに報告されたデルマイオス成体の能力の事よ。　正確には石化じゃなくて硬化させる能力らしいんだけど……。」

アプルがイズ化に告げる。

「デルマイオスにそんな能力まであるんですか？」

ミカンが尚も信じられないのか聞いてくる。

「まあギルドの方でも本当なのか疑問視してたらしいんだけどね。」

「……てか来るわよ！」

アプルがそう言うと同時にデルマイオスが砂煙のか出てきた。

まず初めに出てきたのは白っぽい色の羽毛の中に明るい茶色のクチバシだけが見える頭部だ。

次にコレまた白っぽい羽毛で覆われた胴体に皮膜ではなく羽毛の翼、更に鳥のように尾羽のみの尻尾が出てくる。

ミカンが以前倒したヒブノックも鳥竜種の中ではかなり鳥に近い部類には入るだろうが、デルマイオスの姿はほぼ鳥そのものだ。

「グアアアアアア！」

デルマイオスは姿を現すと同時に一声上げてミカン達に襲いかかってきた。

2・旧沼地のデルマイオス（後書き）

と、言う訳でいかがでしたか？

アプル：「……タイトルは『旧沼地のデルマイオス』なのになんで殆どデルマイオス出てこなかったな（汗）」

う、うん（汗）

確かに出てこなかったな（汗）

ミカン：「そんな事はいいから早く続き書いてってっ」

アプル：「そんな事って……（汗）」

ってかちよつと待て！

次は大海の執筆するから少し黙ってる！

ミカン：「え〜〜？」

「え〜〜？」じゃないって！

っつー訳だからじゃあな！

ミカン：「ちよつと、逃げるな〜!!」

アプル：「……やれやれ（苦笑）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7124j/>

ギルドナイトを目指して！

2010年10月9日16時03分発行